

学校教育目標	視覚障がいのある児童生徒一人一人の自立と社会参加をめざし、教育的ニーズに応じた教育を行うとともに、豊かな心とたくましく生きる力を育てる。 (ミッション) 自分らしく、一人一人が輝いて生きる力を育てる。(QOLの向上) (キーワード) 「つながる」	今年度の 重点目標	①主体的な学びに向かう授業実践（専門性の向上） ②キャリア教育の推進 ③仲間と協力し、生活を工夫する児童生徒の育成 ④チームで取り組むセンター的機能の充実 ⑤児童生徒の健康と安全を守る教育の推進 ⑥環境整備を通した業務の改善
--------	---	--------------	---

年 度 当 初							中間評価（ 9 ） 月		
評価項目	部科・分掌	評価の具体項目	現状	(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評価基準	経過・達成状況	評価	改善方策
①学習指導の充実及び専門性の向上	小中学部	○児童生徒が、主体的に学習に取り組む態度を養い、言語活動を通して基礎的な知識の定着及び技能の習得を図る。	○児童生徒の学習意欲は高まり、基礎的な知識は定着しつつあるが、言語活動を通しての技能の習得については指導が必要である。	○児童生徒が主体的に学習に取り組めるようになり、言語活動を通して基礎的な知識の定着及び技能の習得ができています。	○月1回の部科会やグループ研等を通じ、児童生徒の状況に関する情報交換を日常的に行い、支援や指導方法の改善を図る。 ○I C T機器等を活用したり、触察等の体験的活動を取り入れたりして、言語活動を充実させ、主体的に学習に取り組めるよう教材教具を工夫する。	児童生徒の学習状況による評価 A：児童生徒が主体的に学習に取り組み、言語活動を通して、基礎的な知識・技能の習得ができた。 B：児童生徒が主体的に学習に取り組み、言語活動を通して、基礎的な知識・技能の習得がだいたいできた。 C：児童生徒が主体的に学習に取り組み、言語活動を通して、基礎的な知識・技能の習得があまりできなかった。 D：児童生徒が主体的に学習に取り組み、言語活動を通して、基礎的な知識・技能の習得がほとんどできなかった。	部科会やグループ研等で児童生徒の状況について情報交換を行い、支援方法の工夫や改善を行っている。児童生徒は基礎的な知識の定着や技能の習得をしつつある。	B	引き続き情報交換をすすめ、言語活動の充実に関する助言を受けながら、児童生徒が主体的に学習に取り組めるような活動や体験を取り入れていく。
	普通科	○生徒が主体的に学習に取り組み、苦手なことや課題にも向き合い、克服できるように学習活動の工夫と改善を図る。	○日々の学習や集団活動を通して経験を積み重ね、概ね落ち着いた学習に取り組んでいるが、自己理解が不十分であったり、苦手な活動には消極的になってしまったりすることがある。	○生徒が自らの良さ、個性を生かしながら主体的に学習に取り組み、苦手なことや課題にも向き合い、克服しようとしている。	○生徒が自己理解を深め、主体性が高まるよう、生徒が自分で学習の目標を立て、学習後に目標の振り返りを行う。 ○主体的に学習参加する力を育てる集団活動の場面や役割を設定する。	○生徒にアンケートをとり、その結果をもとに部科教職員で評価を行う。 A：集団活動における適切な場面や役割の設定がなされ、全ての生徒の学習に対する主体性が高まった。 B：集団活動における適切な場面や役割の設定がなされ、半数以上の生徒の学習に対する主体性が高まった。 C：集団活動における適切な場面や役割の設定がなされたが、学習に対する主体性が高まった生徒は半数未満だった。 D：集団活動における適切な場面や役割の設定がなされず、全ての生徒の学習に対する主体性が高まらなかった。	生徒のアンケートによる回答では、全ての生徒の学習に対する主体性は高いが、「集団活動において役割があまりない」、「授業の目標を自分で立てていない」という回答もあり、それぞれ改善が必要であった。	B	学習の目標の設定と振り返りを行い、生徒の実態に応じて板書するなどの工夫をすることで、生徒が目的意識をもって学習に取り組むことができるようにする。集団活動での司会進行や、タブレット操作など生徒が自分の力を発揮できるような役割の設定を工夫する。
			○社会経験やいろいろな人との関わりの経験が少なく、状況や場面に応じたコミュニケーションや社会人としてのマナーについての学習が十分ではない。	○状況や場面に応じたコミュニケーション能力が高まり、目標設定した社会人として必要なマナーや態度が身に着いている。	○活動の見通しをもてるよう、状況や場面に適した思いを伝える言葉とその使い方の例示を行う。 ○報告・連絡・相談や自分の思い、体調などを表出する場面を学習に取り入れ、随時評価を行う。	○作業学習や自立活動など関連する学習の評価をもとにして部科教職員で評価を行う。 A：全ての生徒のコミュニケーション能力が高まり、社会人として必要なマナーや態度が身についてきた。 B：半数以上の生徒のコミュニケーション能力が高まり、社会人として必要なマナーや態度が身についてきた。 C：1名の生徒のコミュニケーション能力が高まり、社会人として必要なマナーや態度が身についてきた。 D：全ての生徒のコミュニケーション能力が高まりらず、社会人として必要なマナーや態度が身についていない。	学部研究としても取り組み、作業学習や各教科などで実践を重ねた。産業現場等における実習においても、報・連・相の目標を設定して取り組んだ。ただ、まだ十分にコミュニケーション能力と社会人としてのマナーが身についたとは言えない。	C	「実習日誌」や各学習の「振り返り表」を活用し、（コミュニケーションやマナーに関する）目標や成果・課題を生徒と共有しながら継続して取り組む。また、学校生活を通して、いろいろな人との関わりの場面を大切に、適宜指導を行う。
	保理専攻科	○生徒が主体的・対話的に学び、目標への見通しを持って粘り強く取り組むことをめざした授業改善を図る。	○生徒は資格取得に向け、積極的に学習に取り組んでいる。 ○次期学習指導要領に向けた指導方法の研究への取組は今後も継続が必要である。	○教職員は、自ら進んで学び、目標達成に向けて取り組む生徒の姿を考えた授業改善に、部科全体として取り組んでいる。	○生徒の目指す具体的な姿を考えた授業の改善・工夫についての研究会を年間10回以上実施する。 ○合同学習や課題研究などで、自己の学習成果を確認したり、取組への動機づけとなるような課題を設定する。	授業の工夫・改善に対して部科としての取組状況により評価。 A：工夫改善の具体的な取組が進み、全員が取組を共有できている。 B：工夫改善の具体的な取組が進んだ C：工夫改善への方向性が決まった。 D：工夫改善への方向性が定まっていない。 E：工夫改善への取組が全くない。	月1回の研究会で、授業の改善・工夫のために、各授業での取り組み内容について部科全体で情報共有、意見交換を行っている。 次期学習指導要領に向けて、各教科・科目の指導計画書の見直しを行っているところである。	B	生徒のめざす姿のモデルとなるような外部講師や先輩の話聞く機会を設定し、目標実現のための準備や心構えについて具体的にイメージできるようにする。

① 学習指導の充実及び専門性の向上	保理専攻科		○新型コロナウイルス感染予防対策として、iPadを活用したオンライン授業を行ってきている。現在はPCを活用することでオンライン授業の幅を広げようと取り組んでいる途中である。	○生徒は、学習や復習、演習問題の活用などにICTを活用することで、自己の学習成果を確認している。	○生徒の実態や目標に即したICT活用の方法を実践し、学習教材や課題の提供、授業の工夫を行う。 ○生徒アンケートを行い、授業や指導の改善に活かす。	授業の工夫・改善に対して部科としての取組状況により評価。 A：工夫改善の具体的な取組が進み、全員が取組を共有できている。 B：工夫改善の具体的な取組が進んだ C：工夫改善への方向性が決まった。 D：工夫改善への方向性が定まっていない。 E：工夫改善への取組が全くない。	1 学期末の専攻科合同学習、専攻科 2・3 年の課題研究発表などを通して、生徒は学んだ知識を活用したり深めたりすることができた。	B	次期学習指導要領に基づいた 3 観点を盛り込んだ指導計画書の作成に取り組む。
	教務部	○学習指導要領等の周知を図るとともに、教育課程編成の中核を担う。	○来年度より高等部学習指導要領が年次進行で実施となるため、新学習指導要領に対応した教育課程を編成する必要がある。また、大学入学共通テストに対応した教育課程の検討が必要である。	○新学習指導要領や大学入学共通テストに対応した高等部教育課程を編成する。	○「鳥取県立高等学校 教育課程編集・実施の手引き」の内容を関係教職員に情報提供する。 ○他校の教育課程や大学入学共通テストに関する情報を収集し、参考にする。 ○教育課程委員会と部科会で連携して教育課程を編成する。	高等部教育課程編成の進捗状況による評価 A：教育課程を申請し、承認された。 B：教育課程を申請した。 C：原案を作成し、検討中である。 D：原案を作成中である。	準ずる教育課程については教科担当者を中心に、重複教育課程については高等部普通科を中心に検討した。検討結果を基に教育課程委員会を 3 回実施し、原案ができた。	C	特別支援教育課の指導を受けて、必要に応じて再検討・修正を行う。1 1 月中に承認申請を完了させる。
	教育研究部	○各教科・科目等での指導・支援の充実を図り、授業の工夫・改善に取り組む。	○昨年度は、部科ごとの研究 1 年目として、研究会（年間 9 回のグループ研究会と月 1 回の部科会の研究会）、授業研究会を実施し研究に取り組んだ。研究報告会では、各部科ごとの取組を全職員で共有できた。各グループでは、一定の成果とともに課題も出てきている。課題について、具体的な改善策を立て、全職員で共通理解をして 2 年目に	○昨年度の研究成果と課題をふまえ、今年度、研究 2 年目として部科ごとに各研究主題に沿って指導・支援を工夫し、計画を立て協力して研究に取り組む職員集団。	○年間 9 回のグループ研究会と月 1 回の部科会の研究会を部科ごとの研究会として実施 ○1 回の全体報告会の実施 ○年間 3 回の授業研究会の実施（部科ごとで 1 回） ○教職員の相互授業参観を通して、お互いの授業を参観し、気づきあい学びあいをすることで研究の推進、専門性の向上、授業力の更なる向上につなげる。	○職員アンケートにより、研究・授業改善について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 A 3 分の 2 以上の職員 B 半数以上 3 分の 2 未満の職員 C 3 分の 1 以上半数未満の職員 D 3 分の 1 未満の職員	・研究 2 年目として部科ごとに各研究主題に沿って計画を立て協力して研究に取り組んできている。研究授業がこれからの学部もあるが、指導・支援などを模索しながら研究を進めている。1 学期末には各学部の研究の状況を全職員で共有できた。	B	引き続き、部科ごとに研究テーマに沿って指導・支援を考え計画を立て研究に取り組む。また、来年度からの部科ごとの研究 3 年目に向けて準備を進める。
			○児童生徒は、研究の実践（主体的・対話的で深い学び）を通して、新しい時代に必要となる児童生徒の資質・能力は伸びてきている。この成果を全体に広げていけるようにしたい。	○部科ごとの研究 2 年目の実践を通して、主体的・対話的で深い学びを通して、新しい時代に必要となる資質・能力（3 つの柱：①生きて働く知識・技能②思考力・判断力・表現力③学びに向かう力・人間性）を身につける児童・生徒。			・研究 2 年目として取り組んでいく中で、児童生徒の意識も高まり、資質や能力も身についてきている。今後も引き続き取り組み、しっかりと定着を図ってきたい。	B	
	教育研究部	○教職員が自ら研修を企画実施することで、視覚障がい教育の専門性の向上を図る。	○校内研修を動画撮影し、全職員で共有できるようにした。参加できなかった着任者も全員が研修を視聴することができた。研修担当者は、研修を担当することで視覚障がいの知識を深められたとしながらも、昨年度の研修に関する意見や要望が多数あった。研修の持ち方、研修内容や構成、着任者研修の時期、外部講師の招聘などを検討し改善していきたい。特に、点字指導の継承を校内研修でしっかり取り組んで欲しいとの要望があった。	○担当する視覚障がい教育の分野についての知識が深まり、研修を行うことができる。研修で学んだことを日々の授業に生かすことができる。特に、職員ひとり一人が意識して点字の継承に取り組んでいる。	○校内研修を年間 1 6 回、視覚障がい教育に関する内容を中心に 7 分野に分けて実施する。 ○3 年目以降の教職員は担当分野についての研修を 2 ～ 3 回担当する。 ○アンケートでの意見や要望を次回からの研修に生かす。 ○点字研修では、演習を多く取り入れ職員が実践に活用できるように工夫する。	○職員アンケートにより、研修について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 A 3 分の 2 以上の職員 B 半数以上 3 分の 2 未満の職員 C 3 分の 1 以上半数未満の職員 D 3 分の 1 未満の職員	・今年度は、座学と演習を交えた研修や、日頃の授業実践を紹介する研修など、研修を担当する職員の創意工夫が随所に見受けられている。研修を担当したり、研修に参加したりして、視覚障がい分野の理解や技能が身につくにつれあとしながらも、まだまだ勉強が必要だと感じている職員も多数あった。また、研修で学んだことを授業に今後は生かしていきたいという意見も多数あった。	B	来年度の研修内容の充実に向けて、研修担当者での振り返りと検討をおこなう会を開く。

様式 2

② キャリア教育の推進	教育研究部		○昨年度コロナ感染症を防止するため、職員が一同に集まって密にならないように研修方法を検討し実施してきた。昨年度取り組んできたことは、今年度もしっかり継続していきたい。	○コロナ感染症を防止するため職員が一同に集まって密にならないように研修方法を検討し実施する。延期や中止になった研修内容を資料等（動画を含める）を見て学ぶことができる。	○会場を分散してリモートで実施し、コロナ感染症の防止に努める。 ○研修で使用した資料等（動画も含める）は、全職員が閲覧・活用できるように、保存場所を決め全職員に知らせる。	○職員アンケートにより、研修について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 A 3分の2以上の職員 B 半数以上3分の2未満の職員 C 3分の1以上半数未満の職員 D 3分の1未満の職員	・今年度は、コロナ感染拡大防止のため、リモートでの研修を計画し、情報担当の先生の協力を得て、実施できている。研修の動画視聴については、あまり見れなかったが、今後、見て授業改善に生かそうと思って いる意見が多数あった。	C	研修の資料や動画の保存場所を明確にして、全職員に伝える。特に、着任者の先生が全研修を受けられたのか確認できる資料を作成し声をかける。
	小中学部	○主体的に仕事に取り組んだり、計画的に行動しようとしたりする意欲や態度の育成を図る。	○主体的に活動する姿が見られ、責任をもって取り組めるが、自分で計画して活動することは難しい。	○児童生徒が主体的に仕事に取り組んだり、計画的に行動しようとしたりしている。	○日々の活動や年間行事等の見通しを持たせ、具体的に何をすればよいか示しながら、活動できたことを称賛する。 ○キャリアパスポートを活用し、将来の夢や進路について本人への意識づけを図り、系統的に指導を進める。	児童生徒の行動による評価 A：児童生徒が主体的・計画的な行動ができた。 B：児童生徒が主体的・計画的な行動がだいたいできた。 C：児童生徒が主体的・計画的な行動があまりできなかった。 D：児童生徒が主体的・計画的な行動がほとんどできなかった。	受け身であることもあったが、目標を意識して行動したり、活動を通して学んだことを普段の生活に活かしたりすることができた。	B	自分で考えたり、まとめたり、やってみようとしたりする場面を増やし、振り返りの時間を確保することで、良かった点・改善すべき点を把握し、主体的に活動できるよう支援していく。
	普通科	○生徒が自己理解に基づいた適切な進路選択・決定ができるよう、キャリア教育の充実を図る。	○作業学習や産業現場等における実習を通して、働くことについての理解や自己理解を進めている。今後、様々な経験をしながら卒業後の過ごし方や就労についてのイメージをつかんでいく必要がある。	○産業現場等における実習の経験や就労・社会参加に関する情報提供により、適切な進路選択・決定ができる。	○生徒の状況や希望に沿った実習先の選択、事前事後指導の充実を図る。 ○ハローワークや就労・生活支援センター等の関係機関とも連携して、就労・社会参加に関する情報提供を行う。	(3者) 懇談や進路希望調査の結果を受け、部科教職員で評価を行う。 A：生徒が自己の進路を考え、進路選択・決定をしている。 B：生徒が自己の進路を具体的に考えている。 C：生徒が自己の進路を考える意識はあるが具体的には考えていない。 D：生徒が自己の進路を考える意識が不十分である。	2回目の産業現場等における実習先を決めるため、夏季休業中に生徒・保護者・担任が参加する職場見学を実施した。さらに実習先選びに悩んでいる保護者にはさらに見学の機会を設定した。生徒は進路についてまだ具体性は低いが、進路希望調査等を通して業種や就労形態についても考え、回答した。	C	生徒・保護者が希望や実態に合った実習先や就労先候補を選ぶことができるよう、ハローワーク等関係機関と連携しながら情報提供を行う。作業学習、産業現場等における実習等を通して生徒が自己の適正の理解や自己理解が深まるよう支援する。
				○キャリアパスポートの作成と活用を通して、自己理解と受容が深まる。	○ホームルーム活動を中心として、生徒一人一人の目標修正などを支援し、個性を伸ばす指導へとつなげる。	キャリアパスポートを部科教職員で評価する。 A：キャリアパスポートの作成・活用により、十分に生徒の自己理解、自己受容が深まった。 B：キャリアパスポートの作成・活用により、十分に生徒の自己理解、自己受容が深まってきている。 C：キャリアパスポートの作成・活用により、十分に生徒の自己理解、自己受容が深まる兆しがある。 D：キャリアパスポートの作成・活用をしたが、十分に生徒の自己理解、自己受容が深まっていない。	計画に沿ってキャリアパスポートの作成が進んでいるが、活用場面を今後設定していく段階である。	C	産業現場等における実習の振り返りや次回の実習先の選択時など、自分の適性や興味関心を考えながら自己理解を深める場面で活用する。さらに、ホームルーム活動を中心として、各生徒に必要な場面での活用を行う。
	保理専攻科	○進路目標の具体化につながる体験活動や進路情報の提供、充実及びコミュニケーション力の向上を図る。	○生徒は、現場実習や職場見学、進路情報などを通じて、自己の進路について考えているが、1・2年生については希望先が明確な生徒は少ない。 ○患者さんや周囲の人と適切なコミュニケーションをとることに自信を持ってない生徒もいる。	○1・2年生は自己の目標が定まりつつある。 ○3年生は進路が決定している。 ○患者さんや周囲の人と適切なコミュニケーションができている。	○体験学習や見学の実施と、事前事後指導、生徒同士の報告会などによる個々のキャリア教育の充実を図る。 ○医療現場におけるコミュニケーションに関する講習会、理療に関する専門家を招いての講習会を設定し、専門性の向上を図る。また、臨床実習やマッサージ実習などでの対応について評価を受ける機会を設ける。	各学年の達成目標に対しての状況を総合的に判断。 A：全員の生徒が卒後の進路や生活についてわかりやすく伝えることができる。 B：8割の生徒が卒後の進路や生活についてわかりやすく伝えることができる。 C：5割の生徒が卒後の進路や生活について具体的に伝えることができる。 D：3割の生徒が卒後の進路や生活についてわかりやすく伝えることができる。 E：卒後の進路や生活についてわかりやすく伝えることができる生徒が3割未満である。	自分の進路や生活について、周囲にわかりやすく伝えることができている生徒は半数程度である。目指す進路先が定まっている生徒もいるが、具体的な希望を持つに至っていない生徒もいる。 特別非常勤講師によるコミュニケーションに関する授業を通して、生徒は医療面接の進め方や患者さんとの信頼関係形成のための工夫など、学んだことを実習の中で活かそうとしている。	C	各学年で実施した見学・体験学習について、見学先の様子や学んだことを生徒同士で共有する合同学習を設定し、生徒のキャリア教育の充実につなげる。 コロナ感染症の状況等を見ながら、産業現場等における実習や校外マッサージ実習を計画・実施し、生徒の理療、コミュニケーション技術の向上につなげる。

様式 2

② キ ャ リ ア 教 育 の 推 進	支援部	○個に応じた進路情報の提供と進路実現に努める。	○生徒の居住地が全県にまたがっているため、県全域の職場開拓、求人等の情報が必要である。	○進路先や実習先の開拓及び情報提供を行うことで、進路選択の幅が広がっている。	○就労定着支援員、ハローワーク等関係機関と連携を図る。 ○コロナ禍による不測の事態に備え、産業現場等における実習、事業所見学、面接等の準備・打ち合わせを早い段階から綿密に行う。 ○就労促進セミナーなどで盲学校の生徒の就労・社会参加について広く情報を提供する機会を設ける。	児童生徒の取り組みとアンケートにより、総合的に評価A：生徒は得た情報を、将来の進路実現や実習先選別に役立てている。 B：生徒は自分の将来や進路に関する情報を得ようとしている。 C：生徒は自分の将来について、関心はあるが情報収集しようとしていない。 D：生徒は自分の将来や卒業後についてまだ関心がない。	・就職の日程を意識し、採用に向けて準備を進めたり、実習に向けて作業の練習に集中して取り組む姿勢が見られた。その一方で実習や進路実現に向けて情報収集の時間を十分に確保することができない生徒もいた。。	B	・2学期の実習先や希望する進路に関する調べ学習の時間を確保する。 ・就労促進セミナーを本校で開催する機会を活用して就労へのプロセスや進路実現の方法について情報収集し、パネル展示等で発信する。
		○自立と社会参加に向け、児童生徒が自己の課題解決に向けた取り組みをするよう促す	○キャリア教育に関する自己の課題について、児童生徒の意識に差がある。	○児童・生徒がキャリア教育に関する自己の課題がわかり、解決に向けて取り組んでいる。	○キャリアパスポートの目標を掲示し、意識できるようにする。 ○個に応じたキャリアパスポートの作成、活用ができるように事例紹介や作成方法について支援部で話し合い、生徒に伝えていく機会を設ける。 ○産業現場等における実習や事業所見学を通して児童生徒が自己の課題に向き合う機会を設ける。	児童生徒の取り組みとアンケートにより、総合的に評価A：自分の課題を意識し、自ら解決に向けて取り組んでいる。 B：自分の課題解決に向け、すすんで取組もうとする姿が見られる C：自分の課題解決に向けてアドバイスを受けて取り組んでいる。 D：自分の課題解決に向けて取組もうとする姿がみられない。	・4月に設定したキャリアパスポートの目標を実習目標に生かすなど活用できたクラスもあったが、全体としては課題解決への取り組みは受け身な部分が多かった。 ・実習や事業所見学については意欲的に参加し、振り返りで課題認識を深めることができた。	C	・キャリアパスポートや個別の教育支援計画の目標を掲示したり、課題の提示方法を工夫したりする。 ・キャリアパスポートの取組について他校を参考にしたり県教委の助言を受けたりする機会を設ける。 ・必要に応じて事業所見学の機会を設定する。
	寮務部	○卒業後を見据え、社会参加・自立した生活を送れるように主体性を育てる。	○保護者、保証人、鳥取盲学校各部科・鳥取聾学校との連携が円滑に取れつつある。更なる連携の強化を図り、共通認識し一貫して取り組み、舎生一人一人の主体性を育成することが課題である。	○卒業後を見据え、個別の教育支援計画の目標を達成し、舎生一人一人の主体的な行動が増えている。	○個別の教育支援計画をもとに、舎生一人一人の障がい特性を理解し、社会自立へ向けてスモールステップで指導支援を行う。 ○舎生に寄り添い、観察し、保護者保証人、部科との連携を密にすることで、情報を共有し、舎生の主体性を育むための生活指導・支援について、チームとして職員全体で創意工夫し、共有、実践する。	保護者・保証人、学部と連携し、個々の課題を共有し、スモールステップで実践することで、舎生の主体的な行動が A：全員増えた。（11人） B：8割以上増えた。（9人） C：6割以上増えた。（7人） D：4割以上増えた。（5人） E：3割以上増えた。（4人）	・社会性やコミュニケーション、基本的生活習慣等舎生一人一人の目標や課題を意識し、スモールステップで場を捉えて繰り返し指導支援することで、主体的な行動が増えてきた。（7人達成） ・保護者、保証人との連携を軸に寮務部職員、盲聾学校関係者（管理職、担任等）や外部専門家と積極的に情報共有することに努め、一貫した取り組みにつながっている。	C	今後も保護者、保証人、寮務部職員、盲聾学校関係者（管理職、担任）や外部専門家との情報共有を密に連携を取り、舎生一人一人の主体性を育成できる環境設定や声かけを継続して取り組む。

様式 2

③ 仲間と協力する児童生徒の育成	小中学部	○相手の気持ちを考えた言動ができるようにする。	○相手を思いやる言葉遣いや行動が見られるようになってきたが、1人学級だと相手の気持ちを推し量ることが難しく、不用意な発言をしてしまうことがある。	○集団場面でも、相手の気持ちを考えた適切な言動ができる。	○居住地校交流、学校行事、日々の学校生活等を通して、教師が相手の状況や気持ちを伝え、相手の心情を考える場面を設定し、自分の考えが言えるようにする。その際、見守りや励ましを行う。	児童生徒の言動による評価 A:相手の気持ちを考えた言動がほぼできた。 B:相手の気持ちを考えた言動がだいたいできた。 C:相手の気持ちを考えた言動があまりできなかった。 D:相手の気持ちを考えた言動がほとんどできなかった。	相手の気持ちを推し量ることが難しいため、困ってしまったり、不適切な言動が見られたりすることがある。	C	生活上のあらゆる場面で自分の言動について、考える機会を継続的に持ちながら、問題と考えられる場合はその場で指導したり、即教材化して指導したりする。
	指導部	○集団や社会の一員としての自覚を深め、自主自立・思いやりの精神を養う。	○小学部低学年から50歳の児童生徒がそれぞれ自分と向き合い、自己理解、自己の障がい理解を進めている。 ○年代、障がいの状況が大きく異なることから、他者のことまで考えが至らず、自分本位の考えになってしまうこともある。	○児童生徒が自分も友だちも大切にし、仲間と協力して活動している。	○児童生徒会行事では、児童生徒の思いや希望を取り入れながら計画を立案する。 ○行事担当の児童生徒を中心にしながら、それぞれが役割を果たし、仲間と協力して活動できる場面を設定する。	児童生徒会行事後に児童生徒と教職員のアンケートをとり、その結果をもとに指導部で評価を行う。 A:全ての児童生徒会行事の企画に生徒の思いが反映され、児童生徒が役割を果たし、仲間と協力して活動する場面が設定された。 B:8割の児童生徒会行事の企画に生徒の思いが反映され、児童生徒が役割を果たし、仲間と協力して活動する場面が設定された。 C:6割の児童生徒会行事の企画に生徒の思いが反映され、児童生徒が役割を果たし、仲間と協力して活動する場面が設定された。 D:4割以下の児童生徒会行事の企画に生徒の思いが反映され、児童生徒が役割を果たし、仲間と協力して活動する場面が設定された。	全ての児童生徒会行事の前に、担当の児童生徒と教職員が話し合いを持ち、計画を立てたり、役割分担を決めたりした。それぞれの児童生徒が自分のできることや、参加する児童生徒のことを考えながら立案した。行事の場面でもそれぞれが役割を果たし、仲間と協力する姿が見られた。	A	今後も行事の前には話し合いを行い、事後にはアンケートで振り返りを実施していく。
④ センター的機能の充実	支援部	○視覚障がい理解啓発を推進するため、盲学校のよさを積極的に情報発信する。	○学校等からの依頼を受け、感染防止対策をしながらねらいや依頼内容にあった研修内容を選び実施した。 ○県内市町村の乳幼児担当課に、乳幼児の見えにくさに関する教育相談のチラシを送付した。 ○中部地区教育支援センターわくわくの新設にあたり関係機関には、聾学校と協力してわくわくのチラシを配付した。	○校内の人材を活用し、多様なニーズに応じて支援を推進し、積極的に情報発信をして理解啓発につなげる。	○ホームページの支援部関連の部分について、最新の情報になるよう定期的に更新する。 ○おたより、お知らせ等で視覚障がいの情報発信をする。 ○交差点角の掲示板を活用し、センター的機能等の周知を図る。 ○ニーズに応じた支援を行ったり、研修会を提供したりする。 ○教育相談の事例検討を行い、見えにくさへのよりよい対応・支援方法を模索する。	A:校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援活動を推進しながら毎月定期的にホームページやおたよりで視覚障がいの情報発信をした。 B:校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援活動を推進しながら学期に2回以上は情報発信をした。 C:ニーズに応じた支援活動を推進しながら学期に1回情報発信をした。 D:ニーズに応じた支援活動を推進しながら年2回は情報発信をした。 E:支援活動を推進したが、情報発信はできなかった。	・4月につくしんぼ・きらら・わくわくだよりを1回発行。 ・おたよりを発行すべく、親子教室参加の家庭に肖像権の承諾を得ているが2学期は、まだおたよりの発行には至っていない。 ・情報発信のための元原稿をいくつかに分割して修正する提案はできたが、まだ修正中でホームページでの情報発信はできていない。	C	・おたよりの第2弾を発行する。 ・ホームページで発信する情報を精査し、載せる。
⑤ 児童生徒の健康と安全を守る	小中学部	○望ましい生活習慣や防災意識の定着を図る。	○清潔、身だしなみ等の生活習慣の必要性は理解しているが、定着には至っていない。 ○防災意識はあるが、日常生活の中で忘れてしまうことがある。	○望ましい生活習慣や防災意識が定着し、安心安全な学校生活が送れる。	○清潔、身だしなみ等の生活習慣について、養護教諭と連携しながら定期的に指導をしていく。 ○計画的に防災学習を行い、危険回避ができるよう指導をしていく。	児童生徒の行動による評価 A:望ましい生活習慣や防災意識が定着した。 B:望ましい生活習慣や防災意識がだいたい定着した。 C:望ましい生活習慣や防災意識があまり定着しなかった。 D:望ましい生活習慣や防災意識がほとんど定着しなかった。	手洗い、手指消毒等の衛生面の意識は高いが、身だしなみについては努力を要することがある。 計画的に避難訓練等の事前・事後学習を実施し、防災意識は高まっている。	B	身だしなみ等の生活習慣については、繰り返し指導していく。 防災学習では、わかりやすい掲示物、資料などを作成し、危険回避できる意識づけの向上を図る。
	指導部	○感染症予防の対策がとられ、児童生徒が安心安全に学校生活を送ることができる。	○新型コロナウイルス感染症の流行により、学校生活の様々な場面を感染症予防の視点から見直したり、個々の予防行動の実践が必要となっている。	○児童生徒が感染症予防に関し、安心感をもって学校生活を送っている。	○感染症予防の視点から、学校生活環境を見直す。 ○児童生徒が、自らすすんで感染防止のための一般的な予防行動をとることができる。	アンケートで評価 A:感染症予防の視点からの学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動が十分できている。 B:感染症予防の視点からの学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動が概ねできている。 C:感染症予防の視点からの学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動があまりできていない。 D:感染症予防の視点からの学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動がほとんどできていない。	児童生徒へのアンケート結果（A～Dまでの選択肢） 児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動が十分できている。 A:（8名） B:（2名） C:（0名） D:（0名）	A	今後も個人目標の取組について、健康観察時に自己チェックをし意識を継続させていく。また、目標設定の見直しも本人や担任と検討していく。

様式 2

		○個々の健康課題解決に向けて取組を行い、健康的な生活を送るために支援する。	○小学部低学年から50歳代の児童生徒がおり、それぞれ年齢や基礎疾患、体力の状況等に応じてさまざまな健康課題がある。	○児童生徒が健康課題に目を向け、自ら心身の健康の保持増進に取り組もうとする態度や実践力が養われる。	○学部や教科等と連携して、個別のプログラムを組み年間を通して実践していく。	児童生徒が達成度を自己評価する。（中間・最終） A：全ての児童生徒が目標を達成できたと評価している。 B：8割の児童生徒が目標を達成できたと評価している。 C：6割の児童生徒が目標を目標を達成できたと評価している。 D：目標を目標を達成できたと評価した生徒が4割以下である。	児童生徒へのアンケート結果（A～Dまでの選択肢） 目標達成に向け、具体的取り組み内容が計画通りに実施できた。 A：（2名） B：（6名） C：（2名） D：（0名）	B	個人目標達成のために、意欲的に活動に取り組めるよう、学級担任と児童生徒が話し合いながら取り組みを継続する。
⑥環境整備を通じた業務の改善	総務部	○共有フォルダの見直しを行う。	○担当者が、行事等計画立案の際、過去の同じ行事計画データを部科分掌フォルダ内に保存したままにするため、共有フォルダ内に同じフォルダが複数できている。 ○各自の判断でフォルダ内にデータの保存をしているため、参考データを探す際に時間がかかる。	○共有フォルダ内は、保存のルールに則ったデータ管理ができている。 ○業務に必要なデータを短時間で探し出すことができる。	○共有フォルダ内のデータ保存のルールと整理について提示し、周知徹底を図る。 ○重複保存されているデータの整理を行うとともに、業務改善に務める。 ○必要以上に残している個人の写真動画データについても保存の見直しを行い、個人情報流出等につながらないようにする。	共有フォルダ整理に関する進捗状況の評価 A：各部科・分掌のフォルダ内の整理が過去3年分終了した。 B：各部科・分掌のフォルダ内の整理が過去1年分終了した。 C：各部科・分掌のフォルダ内の整理が今年度分終了した。 D：各部科・分掌のフォルダ内の整理に取り掛かされていない。	共有フォルダ内の写真の整理は、整ってきた。動画のデータについても削除依頼を継続していく。文書データについても保存期間の5年以前のものは、整理できている。	C	パワーポイント等のよるプレゼンテーション資料などのデータ容量の大きいものは、データの縮小・圧縮をかけること、動画データの削除も今後も呼びかけていく。
	総務部	○オンラインサービス（Gmail、Meet、fece time Zoom等）の有効活用を行う	○Zoomの職員研修会は、昨年度開催したが、新任者への研修は実施していない。Googleクラスルーム等は、数名の職員は研修会で使用しているが、全職員への周知はできていない。オンライン学習の実施に向けて、基礎知識を得るとともに、技術の習得をめざす。	○オンラインを含めたサービスの活用を図り、業務の改善をめざす。	○校内で、職員研修を行い、有効な活用方法を学ぶ。	オンライン学習に向けての操作に関する評価 A：手順を覚え、一人で活用できる。 B：マニュアルを見ながら一人で活用できる。 C：支援を受けながら一人で活用できる。 D：一人で操作することが、難しい。	職員へオンラインの操作手順の研修会の開催や、オンラインの操作マニュアル書の作成を行った。オンライン学習に向けて、Zoom、Meet、Google Classroom等の操作について、職員へ説明を行っている。	B	今後もオンラインの学習や会議等を積極的に活用できるよう、職員研修等の充実を図り、操作技能の向上をめざしていく。
	教務部	○諸表簿等の適切な管理と各種事務処理の円滑な推進を図る。	○年度始に諸表簿等一式と事務処理年間予定を提示し、学期末・年度末により詳細な情報提供を行っている。さらに適切で円滑な各種事務処理を推進するために、諸表簿の改善が必要である。	○来年度実施に向けて、出席簿をデータ化する。	○出席簿をデータで管理できる様式を作成する。 ○視覚障がいのある教職員も管理できる様式を提案する。 ○作成した様式を試行し、意見を集約して改善する。	出席簿のデータ化の進捗状況による評価 A：職員会議で承認され、新様式が完成した。 B：運営委員会で承認され、職員会議で提案するところである。 C：原案を作成し、改善中である。 D：原案を作成中である。	プルダウンメニューや自動計算を組み込んだエクセルデータの様式案ができた。第1弾として職員会議で提案し、新様式の試行を依頼する準備が整った。	C	新様式や管理方法についてのアンケートを集約し、より扱いやすいものになるよう改善する。今年度中の完成をめざして計画的に職員会議で提案していく。

評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し

〔100%〕 〔80%程度〕 〔60%程度〕 〔40%程度〕 〔30%以下〕